

「わたしの名のゆえに」 -マタイによる福音書講解説教 97-

詩篇 第56章 1節～ 4節
マタイによる福音書 第24章 1節～14節

説教 岡村 恒 牧師

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」(13節)主イエスは、世の終わりの話をされながら、ここでお語りになったのは私たちの救いの話でした。この時、弟子たちは神殿に心を奪われます。巨大で堅固な神殿は神の栄光を表す特別な建物であったはずですが、しかし主イエスは、目に見える物がいずれ全て消え去ってしまうことを良くご存知でした。実際、この神殿は紀元70年にローマ帝国によって破壊されます。

主イエスにこの神殿が崩されると言われた時、弟子たちは大きなショックを受けました。「いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。(3節)弟子たちが尋ねたのは、自分自身の救いの話でした。

ドイツのヴィッテンベルクなどいくつかの街を訪ねました。日本の戦後の統治を決める話し合いがなされたポツダムツェツィーリエンホーフ宮殿を巡りました。当時、宮殿に集まった連合軍は、自分たちがどの部屋を使うかという交渉に長時間を費やし、豪華な調度品を揃え、晩餐会を何日も続けて行いました。そのうちに、ようやく本会議が行われて、ドイツの戦後の国境線が決められ、日本の戦後についての話し合いがなされました。

その写真や展示を見ながら人間の愚かさについて深く思いめぐらしました。今も変わらない現実があることに思いを馳せました。多くの人が飢えと病、争いと憎しみの中に身をおいている現実がある一方で、豊かな生活を営み、多くの利益を享受している私たちがいます。

神殿は、神に赦され祝福を受けることができる最後の頼りになる場所でありました。しかし主イエスは、その神殿が崩れ去るという話をなさいました。主イエスが誰かを知らないまま聞けば、世界の終わりにすべての人は、神の厳しい審判の元で滅び去る他はないという話にしか聞こえませんが、しかし主イエスはもう一つの神殿についてお語りになりました。主イエスの命という犠牲によって、本当の赦しが与えられる神殿、主イエスはご自分のことを神殿と呼ばれました。

主イエスが終わりの日の救いについて約束をされたのです。主イエスはその前に起こること

を列挙して、お話になりました。偽キリストが現れ、信仰者がその内面においても激しい戦いに巻き込まれる。洗礼を受けたがゆえの苦しみに会う事になる。

私が今回訪ねたのは旧東ドイツ地域です。かつて教会は荒廃しました。イエスが主である、キリストが救い主であると告白する者は激しい迫害に会いました。キリスト者たちは、ドイツが統一され、公に神を褒め称えることができるようになった日の喜びを、今も心に握り締めて歩んでいました。「わたしの名のゆえに憎まれる」ということを体験した人々と一緒に祈りました。

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」信仰の旅路に忍耐が必要だという話でしょうか。私たちも日常生活の中で、様々な迫害の中に置かれています。自由に証し、祈り、礼拝を守ることができない戦いがあります。自分自身の中には不信仰との戦いがあり、悪魔の激しい誘惑との戦いがあります。私たちには、この戦いを戦う力など微塵もありません。

宗教改革者マルティン・ルターは、自分の無力さに気づいて途方にくれました。聖書の言葉だけが自分の希望であることを発見し、ただ神にだけ信頼し、神の約束の言葉だけに全身全霊を委ねて生きる、その幸いに彼は気づきました。主イエスは、私たちを用いて全世界に福音を証させるお方です。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」そう言われたお方が、最後まで私たちの歩みを支えてくださるのです。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。(マタイによる福音書28章20節)この約束を知っている者は、今日の御言葉を聞いても絶望せず、平安を得ることができます。

ポツダムやヴィッテンベルクで、荒れ果てた教会に身を置いて祈りながら、神がどこでも、いつでも、信仰者と共にいてくださることを確認しました。主イエスの確かな約束が聖書から溢れ出て響いてきます。主イエスの名のゆえに憎まれる者が、最後まで耐え忍んで救いに入る。その道は主イエスと共に歩む道です。主が導き、助け、支えてくださる道です。ただ神の約束だけが私たちに新しく創り変え、私たちに命を与え、私たちに救いの完成の日まで支えてくださいます。

(記 説教要約奉仕者)